

「俺のこと、いまどう思ってる？」

帰り際、いざ玄関を出ようとするタイミングでのその質問は、あまりにもドラマじみていた。わたしは吹き出しそうになった。年末の特番なんて目にならないおもしろさだった。

キュートアグレッションってこのことなんだ。わたしはくずれそうな表情をどうにかこうにか保ったまま、対応をつづけた。対応というのは、ひさしぶりに会う元カレとの会話のことだ。われながらひどいと思いながら、わたしは楽しまざるをえない。

「……なんで？」

「『なんで』って……」

「わたしはもうすっきりおわたつつもりだよ」

なにか言おうとしていたけど、しつかりと言葉を被せる。

「そっか…そうだよな」

ああ！なんでそんなわかりやすく落ち込んでくれるの？！

「そうだよ。だから、これっきり」

元カレはドアノブをつかんだまま、固まってしまふ。

ああ、なにか悩んでるような顔…今度はなにを言ってくれるの？？

「でも…ああ…それでもおれは……。……」

わたしはおおきな声で笑いだしそうになった。だけど、それ以上に女々しい姿を見たくなくなった。はつきりと、正直に言うことにした。

「いいじゃん。もうすっきり終わろうよ」

「でも、俺はまだ——」

「まずはあなたが間違えて、たしかにわたしも間違えた。だけど、最後に間違えたのは、キミ」  
他の女と何度寝たのかは知らないけど、わたしを裏切った回数は二回。それはたしか。そして、わたしは裏切ってはただひどいことをしたのかもしれない。……。……なんて考えるだけ疲れることをいつまでも頭の中に置いていたくない。だからわたしたちは今日をもって別れる。

「さようなら。げんきでね」

「……………」

「最後までいなか言っつてよ」

「あなたも、元気に、そして幸せに」

扉はやがてゆっくりと閉まった。

わたしは鍵を閉める前に外の通路を見た。だれもいなかった。

「なんとも見送ったなあ……」

勝手にそんな言葉が出た。

おどろいた。そんなぼやきがでるなんて。あ……涙も。